

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：82705

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730774

研究課題名(和文) 発達障害児と共に学ぶ通常学級の学び方を学ぶ学習と協同学習を組合わせた指導の開発

研究課題名(英文) Development of educational method in regular class that combines cooperative learning and the learning of how to learn for children with developmental disabilities and typically developing children.

研究代表者

涌井 恵 (WAKUI, Megumi)

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・教育情報部・主任研究員

研究者番号：80332170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害児も含めた誰もがわかるユニバーサルデザインな授業づくりに、現在多くの教員が苦慮している。本研究はこの社会的要請に応えるために、発達障害児の在籍する通常の学級において、協同学習と学び方を学ぶ学習ける指導プログラムの開発を行い、教師及び子ども向けガイドブックの作成を行うことを目的とした。研究成果として、多重知能(マルチ知能)を活用した「学び方を学ぶ学習」と学び方選択式協同学習を組合わせた実践モデルを開発した。また、教員向けガイドブックと子ども用の教科書を完成させることができた。

研究成果の概要(英文)：Nowadays, many of the teachers in inclusive regular classrooms are concerned about how to create a universal design of lesson plans. The one of purpose of this study is to develop a universal design cooperative learning for including children with LD or ADHD or ASD. And another one is to make up guide books for teachers and children. As a result of this study, the new practical model was developed. In this model, children learn how to learn, and study with cooperative learning in which they could select the way of thinking utilizing multiple intelligence. In addition, the practical guide books for teachers and children were completed and published.

研究分野：社会科学

 キーワード：発達障害 協同学習 学び方を学ぶ 通常学級 多重知能 ユニバーサルデザイン インクルージョン
自己調整

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初における最新の調査結果では、LD (学習障害) や ADHD (注意欠陥多動性障害)、高機能自閉症等の発達障害により学習や生活面で特別な教育的支援を必要とする子どもが 6.3% の割合、つまり 40 人規模の通常学級に約 2~3 名程度の割合で在籍している可能性が明らかになった。これらの発達障害児の中には、学習上の困難に加えて、社会的スキルが未熟であるために仲間関係に困難を抱え、それにより仲間との肯定的な関係を持つ機会がさらに阻害されるという悪循環に陥っている者も多い。こうしたことを未然に防ぎ、発達支援するために、学習指導と共に社会的スキルや仲間関係の促進・調整のための介入の両方が必要となる。

しかし、日本では、学習課題や社会的スキル指導に関して個別や療育場面における指導技法の研究は数多くあるが、通常学級での教科学習の有効な指導技法や支援方略についてはまだ十分に明らかにされていない。授業研究や学校の実践レベルでは、ユニバーサルデザインの授業づくり等の取り組みが見られるようになってきているが⁵⁾、学術雑誌レベルの実証的研究は筆者の知る限りほとんどない。エビデンスに基づいた効果的な指導方略の検証と開発が求められている。

これに対し、欧米では、障害のある子どもとない子どもが共に通常学級で学ぶというインクルージョン教育場面において、仲間との協力関係が学習に組み込まれている協同学習は、障害のある子ども・ない子どもの双方の学力向上や社会性の発達に効果的であることが指摘されている⁷⁾⁹⁾。協同学習では、教材や活動に仲間同士協力することや学び合うことを組み入れて学習を進める⁴⁾。協同学習の利点には、学習到達度の上昇、グループ内の対人関係の改善、自尊心の改善、教科や勉強や学校に対するポジティブな態度、他者への利他的行動や援助行動の増加、葛藤解

決スキルの改善の他、障害のある子どもとない子ども間の相互交渉の増加、(障害のある)仲間の受容度の改善等が挙げられている⁴⁾⁸⁾。しかし、障害のある子どもを含む学級における研究については、まだ系統的な研究が必要である⁸⁾。(a)どの程度の多様性(障害の程度、認知特性の個人差、学習到達度の差、男女比など)のある集団構成にすればよいのか⁸⁾や、(b)障害のある子どもの認知特性や能力に合った学習内容やカリキュラムのアコモデーション(配慮・調整)や、(c)アダプテーション(代替的な回答方法、改良された教材)について検討していくこと必要である¹⁾⁹⁾。

上記(b)と(c)に対して、著者は先行研究([平成 21-23 年度文部科学省科学研究費若手研究(B)「発達障害児の在籍する通常学級における協同学習のユニバーサルデザインに関する研究」(研究代表者: 涌井恵, 課題番号: 21730730)]において一人一人に合った学び方を選べる協同学習を用いた授業によって解決できないかと考え、「学び方を学ぶ」授業と協同学習を組み合わせた実践モデルの開発を行った。「学び方を学ぶ」授業というのは、マルチ知能³⁾と著者が独自に設定した3つの領域(やる気、記憶、注意)の観点から、子どもたち自身に自分はどんな学び方で学んでいるのか、どんな学び方だとわかりやすいのか気づかせること、また自分に必要な支援の手立てを理解したり、その支援を他者(大人や仲間)に要求したりできるようになることを目指した授業である。先行研究では、「学び方を学ぶ」授業によって一人一人の学び方が異なっていることを意識化させたため、支援の必要な子どもへの支援が特異なものとして目立たず、スムーズに自然に行えるようになったこと、協同学習はいろいろな学び方を許容する学習設定を行いやすい授業技法であることが明らかになった。先行研究では漢字学習についての実践が主であったので、算数や体育など他の教科にお

いても協同学習と「学び方を学ぶ」授業を組み合わせた実践が可能であるが検討することが課題として残されている。また、小学校低学年においても「学び方を学ぶ」授業を理解できることが示されたが、年齢段階毎のカリキュラムの開発までには至らなかった。また、「学び方を学ぶ」授業を実施した担任教師から実施のガイドブック等があるとよいとの要望が挙がっている。「学び方を学ぶ」授業は、最終的には子ども自身が自律的に学び方を工夫できるようになることを目指しているため、担任が替わっても学び方の工夫を持続できるような子ども向けのガイドブックの開発も必要である。発達障害のある子どもにとっては、学び方の工夫は自己の障害理解にもつながる重要な課題であるともいえる。

最後に、本研究の特色と意義について挙げると以下ようになる。本研究は、協同学習単独ではなく「学び方を学ぶ」授業を組み合わせることで一人一人の学び方の違いに対応するという独創的な着想をもっている。「学び方を学ぶ」ことは、生涯学習のキーコンピテンシー²⁾として取り上げられており、今後新しい学力観として注目されると考えられる内容に本研究は先駆的に取り組んでいるという特色を持つ。

さらに、本研究は、障害のある子どもだけでなく、“全ての子ども”にとって効果的な指導方法の検討を目的としているという特色を持つ。従来の研究は、通常学級における研究であっても、障害のある子どもだけに焦点化したものが多い。しかし、インクルージョンを成功させるには、障害のある子どもの固有のニーズに焦点を当てた指導だけでなく、全ての児童・生徒の学習をサポートする指導環境の基盤を作ることが重要である⁶⁾。また、実際の通常学級担任の立場から考えても、全ての子に万遍なく対応できる指導方法が求められる。本研究によって、発達障害の

ある子どものみならず、低学力の子どもや、典型発達児における認知特性の多様性・個人差にも応用可能な知見を提供できると考えられる。

2. 研究の目的

そこで、本研究では様々な教科において「学び方を学ぶ」授業と協同学習の組み合わせた指導プログラムを開発し、最終的に教師及び子ども向けの実践ガイドブックを開発することとする。

3. 研究の方法

研究 A：年齢段階別の「学び方を学ぶ」授業カリキュラムの開発、研究 B：「学び方を学ぶ授業」と協同学習を組み合わせた指導プログラムの開発、研究 C：教師向け及び子ども向けのガイドブックの開発という3つの研究を行った。上述の研究 A と B の研究成果を最終的に研究 C へとつなげることにした。

研究 A と B は、研究協力者や研究協力機関（学校）において、当該の授業実践を行い、データを収集した。

4. 研究成果

(1) 研究 A：年齢段階別の「学び方を学ぶ」授業カリキュラムの開発

本研究では、小学3年生、4年生、5年生、6年生に対する授業例を開発することができた。さらに、特別支援学級在籍時の交流及び共同学習や、特別支援学級においても、実践を行うことができ、実践データも収集した。小学6年生のA学級において子ども用テキスト試作版を教材として授業を行ったところ、ふり返しシートの内容分析から、「マルチ知能の得意な力を使って苦手な力を補う」ことが強調されすぎた傾向が示された。マルチ知能の8つの力はその内容はさまざまであって、誰でも持っている力であることを強調する授業内容に改善する必要性が明

らかになった。

別の通常の学級で実施した漢字学習を通じての学び方を学ぶ学習では、漢字の覚え方や練習方法の工夫が多種多様に出され、また漢字テストの平均得点の増加が示された。この漢字学習は、国語の授業の他に朝学習や家庭学習においても組み組んだが、授業時数の兼ね合いが厳しいという課題が挙げられた。総合的な学習などで、「学び方を学ぶ」学習を行い、それを各教科学習においても展開していくことが今後の検討課題として残された。

(2) 研究 B：「学び方を学ぶ授業」と協同学習を組み合わせた指導プログラムの開発

実践データから、学び方を子ども自ら選択することが、やる気を高め、ひいては学習課題の深い探求と理解へ繋がっていることが示された。また、「学び方を学ぶ」学習によって一人一人の学び方が異なっていることを意識させたため、支援の必要な子どもへの授業中の支援が特異なものとして目立たず、スムーズに自然に行えること、協同学習はいろいろな学び方を許容しやすい授業技法であること、また国語、算数、理科、図工等の様々な教科において、また低学年から高学年まで複数の学年において適用可能であることが明らかになった。また、マルチ知能や「やる気・注意・記憶」の観点からの授業づくりの効果等に関する教員アンケート結果から、異動したばかりの教員に対する研修の必要性が指摘された。

また、研究当初は固有な具体的な指導内容から構成される指導プログラムの開発をイメージしていたが、研究の経過から、学び方を選ぶということを要とした、どの教科にも汎用的な実践モデルとして、学び方選択式協同学習というオリジナルな協同学習を提案するに至った。当初イメージしていた指導プログラムよりも、対象年齢や実施教科を限定しない応用可能性の高い実践モデルを提案

することができた。」

(3) 研究 C：教師向け及び子ども向けのガイドブックの開発

研究 A や B の知見を元に、研究基礎的な内容や実践例を掲載した教員向けガイドブックや子ども用テキストを市販本として計 3 冊刊行することができ、さらに、子ども用テキストを活用した授業実践も開発することができ、当初の目的を達成することができた。

(4) 本研究の成果と今後の課題

本研究では、一人一人に合った学び方を選べる協同学習による授業を行うことにより、発達障害のある子ども等も学ぶ通常の学級において、ユニバーサルデザインな授業を実現できないかと考え、「学び方を学ぶ」学習と協同学習を組み合わせた実践モデルの開発を行ってきた。「学び方を学ぶ」学習とは、8 つのマルチ知能 2) と著者が発達障害の障害特性を考慮して独自に設定した 3 つの領域（やる気、記憶、注意）の観点から、子どもたち自身に自分はどんな学び方で学んでいるのか、どんな学び方だとわかりやすいのか気づかせること、また自分に必要な支援の手立てを理解したり、その支援を他者（大人や仲間）に要求したりできるようになることを目指した学習である。

学び方を自分で選ぶことにより、やる気や積極性が高まり、さらには学力向上へとつながることが様々な実践から示された。自己選択、自己決定の力や自分で学習方法を工夫する自己調整の力が学習に及ぼす可能性を見出すことができた。本研究では、発達障害のある子どもが在籍する通常の学級での実践を主な対象として進めてきたが、特別支援学級在籍児も共に学ぶ交流及び共同学習の授業にも実践を拡げることができた。インクルーシブ教育システムにおける効果的な授業としても参考となるだろう。当初の研究計画では、発達障害のある子どもが在籍する通常の学級のみを対象としていたが、それを超

えた研究成果を上げることができた。

<引用文献>

1. Bryant, D. P. & Bryant, B. R. (1998) Using assistive technology adaptations to include students with learning disabilities in cooperative learning activities. *Journal of Learning Disabilities*, 31(1), 41-54.
2. European Parliament and the Council(2006) Recommendation of the European Parliament and the Council of 18 December 2006 on key competencies for lifelong learning. Brussels: *Official Journal of the European Union*.
3. Gardner, H. (1993) *Multiple intelligences: The theory in practice*. New York: BasicBooks. [黒上晴夫監訳(2003)『多元的知能の世界：MI理論の活用と可能性』日本文教出版.]
4. Johnson, D. W. and Johnson, R. T., Holubec, E. J. (2002) *Circle of learning: Cooperation in the classroom (5th ed.)*. Interaction Book Company. (石田裕久・梅原巳代子訳 2010. 改訂新版 学習の輪—学び合いの協同学習入門—二瓶社)
5. 授業のユニバーサルデザイン研究会 (2010)教科教育に特別支援教育の視点を取り入れる 授業のユニバーサルデザイン. Vol.1. 東洋館出版社.
6. McDonnell, J.(1998). Instruction for students with severe disabilities in general education settings. *Education and Training in Mental Retardation and Developmental Disabilities*, 33, 199-215.
7. Meijer, C. J. W. (Ed.) (2001) *Inclusive education and effective classroom practices*. European Agency for Development in Special Needs Education.
8. Snell, M. E., Janney, R, & Delano, M. (2000) Models of peer support in instruction. In Snell, M. E.& Janney, R(2000) *Social relationships*

and peer support. Baltimore, Maryland:Paul H. Bookes Publishing Co.

9. 吉利宗久(2004)アメリカ合衆国のインクルージョンにおける協同学習モデルとその成果 . 発達障害研究, 26(2), 128-138.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 涌井恵 (2013) 学習障害等のある子どもを含むグループにおける協同学習に関する研究動向と今後の課題 - 通常の学級における研究・実践を中心に - . 特殊教育学 研究, 51 巻 4 号, pp381-390. 査読有.

〔学会発表〕(計3件)

1. 涌井恵 (2012) 通常教育に受け入れられる授業や学びのユニバーサルデザインとは?:子どもの主体的で自律的な学びを育む指導と支援 . 日本 LD 学会, 大会企画シンポジウム (招待講演), 2012 年 10 月 7 日, 仙台国際センター(宮城県・仙台市).
2. 涌井恵 (2014) 「通常の学級における特別支援教育に活かす協同教育」(企画及び話題提供), 日本協同教育学会第 11 回大会, 大会企画ラウンドテーブル(招待講演), 2014 年 10 月 25 日, 創価大学(東京都・八王子市).
3. 堀川智子・涌井恵 (2014) マルチ知能を活用した小学 1 年生の算数の学び合い - 繰り下がりのある引き算 - . 日本協同教育学会第 11 回大会プログラム, pp34-35.

〔図書〕(計7件)

1. 涌井恵(2012)すべての子どもたちの「学びやすさ」を追求する協同的な学び合い:特別な教育的ニーズのある子どもたちも含めた可能性 . 授業づくりネットワーク (特集:特別支援教育の発想でどの子も学びやすい授業を創る!), no.6 (通巻 314 号), p. 18-23 .
2. 涌井恵 (2013) 発達に遅れや凸凹にある

子どもの協同(「ピア・ラーニング」中谷素之・伊藤宗達編著), 金子書房, p.205-219.

3. 涌井恵(2014)子ども同士の学び合いでユニバーサルデザインな授業ができる!(「THE 特別支援教育～通常の学級編」青山新吾編), 明治図書, p.34-37.
4. 涌井恵(2014)協同学習で取り組むユニバーサルデザインな学び(柘植雅義編, ユニバーサルデザインの視点を活かした指導と学級づくり), 金子書房, 14-21 頁.
5. 涌井恵編著(2014)学び方を学ぶー発達障害のある子どももみんな共に育つユニバーサルデザインな授業・集団づくりガイドブッカー. ジアース教育新社.
6. 涌井恵(2014)「学び方を学ぶ」テキストー学びの達人(ふるしき忍者)になれるコツー. ジアース教育新社.
7. 涌井恵編著(2015)発達障害のある子とUD(ユニバーサルデザイン)な授業づくり:学び方にはコツがある! その子にあった学び方支援, 明治図書.

〔その他〕

ホームページ等

1. 発達障害教育情報センター研修講義
「どの子ども伸びるユニバーサルデザインな授業・集団づくり(前編)」(平成26年収録)
http://icedd.nise.go.jp/?page_id=1380
 2. 発達障害教育情報センター研修講義
「どの子ども伸びるユニバーサルデザインな授業・集団づくり(後編)」(平成26年収録)
http://icedd.nise.go.jp/?page_id=1381
 3. マルチピザポスターなどの公開サイト
<http://researchmap.jp/read7wakui/>資料公開/
6. 研究組織
(1)研究代表者
涌井 恵(WAKUI, Megumi)
国立特別支援教育総合研究・教育情報部・主任研究員
研究者番号: 80332170